中国残留日本人支援団体 尼崎日本語教室

かけはし

コスモスの会だより

第21号 2022. 11. 1

編集発行：コスモスの会広報部　〒661-0953　尼崎市東園田町4丁目152-16　TEL：06-6493-5563　FAX：06 6493 0817

コスモスの会ホームページ・URL=http://kosumosunokai sakura ne jp/index html

日本語教室の再開

コロナ禍のため、昨年度は長い間休講を余儀なくされた日本語教室、今年4月に再開しましたが、休む人も多く先行きを心配しました。

10月になって皆さん勢ぞろいです。いよいよ従来通りの学習の再開です。

第7回「中国残留日本人への理解を深める集い」を開催

昨年11月20日（土）尼崎市立中央北生涯学習プラザで、第7回「中国残留日本人への理解を深める集い」が開催された。当日は、稲村和美市長をはじめ正・副市議会議長を含め17名の方が参加され、熱心に視聴した。

第1部は信越放送制作「決壊～祖父が見た満州の夢～」を上映。戦争中、長野県河野村で村長を務めた胡桃澤盛氏は、国策に従い村人を満蒙開拓団として満州国へ送り出した。ソ連軍の侵攻で団員73人が強制集団死へと追い込まれた。戦後、盛氏は、罪の意識に苛（さいな）まれ、42歳で自ら命を断った。孫の胡桃澤伸さんは、盛氏の日記を頼りに、祖父が一度赴（おもむ）いた中国を訪ね、足跡をたどる。祖父のかわりになれない自分が、慰霊する意味を見つめたドキュメンタリー。（SBC信越放送は「平和学習への貸し出し」を行い、今回のDVDも無料で借りることができた。）

第2部は、胡桃澤伸さんによる「河野開拓団と祖父と私」のテーマでの講演。精神科の医者として県立尼崎病院に勤務し、尼崎に住んでいたこともあり、尼崎に縁があるという話から始まった。

開拓団２世の対談・交流

村長だった祖父の日記は、歴史的価値があるということで出版されたが、私は日記を見ると気持ちが重くなり、できたら遠ざけておきたい感じだった。しかし、自分にとって大事なことだから、いつかちゃんと手にとらないといけないと思っていた。そして信越放送の取材を引き受けることで、自分なりに祖父の死と日記に向き合いたいと決意した。

子どもの頃、祖母といっしょに寝ていた実家の座敷の鴨居には傷があった。あって当たり前のものだったから聞きもしていなかった。37歳ぐらいの時、父親に尋ねて鴨居の傷の意味を知った。それまで祖父の死と関係なかったものが、パッと像を結んだ。歴史を知らないということは、いかに怖いかということを知った。自分の原点であり大事な所が見つかった。負の歴史、目をそむけたいと思う歴史は、そこから目を背けなければ得るものは大変大きい。今日、皆さんの前で話ができるようになった。祖父の日記の中に「開拓団を悲惨な状況に追い込んで申し訳ない」という一文があることが、私にはすごく救いになっている。自治体の長として、村に良かれと思ってやったことでも、大きな間違いだった。そのことを認め詫びたということは、なかなかないことだと思う。祖父を尊敬する点だ。戦争中、満蒙開拓に送り出した責任者たちに自分の行ったことの結果で何が起きたのか一言でもいいから語って欲しいと思う。現地召集で開拓村を離れていた人たちが戦後村に帰ってきた。祖父が会っていたら自死しなかったのではないか。取材を進める中で、国と国との戦争の後始末がついていないことを肌で感じた。

胡桃澤さんは、会場の一人ひとりに語りかけるように話をされ、印象深く聞いた。（2面につづく）

満蒙開拓平和記念館訪問の旅（長野県阿智村）

9月25日・26日、三年ぶりに研修旅行が行われた。コスモスの会として長年行きたいと考えていた「満蒙開拓平和記念館」である。1世の学習者は昌谷桂子・範茂ご夫妻と芦川常惠さんのみの参加だったが、総勢21名で楽しく訪問した。

記念館はいかにも箱物といった風情は全くなく、和風のゆったりとした木造建物だった。内部の部屋は残留孤児の語りのビデオ、写真パネル、当時を偲ばせる器物、来館者の感想文、千羽鶴、開拓団員名簿など多彩な展示で、満蒙開拓がなぜ行われたのか、そのもたらした人的被害の大きさなどを如実に物語っていた。

満蒙開拓平和記念館を訪問

記念館製作の満蒙開拓のビデオ視聴の後、交流会が行われた。記念館事務局長の三沢亜紀さんをはじめ、飯田日中友好協会・館のボランティアなど6名の方々を交えて、全員で自己紹介をしながら、感想や1世・2世への支援状況などの意見交換を行った。帰国者の抱える課題は尼崎市と同様で、介護支援や病院の付き添いなど、高齢化に伴うものが多かった。和やかなうちに時間が過ぎ、記念撮影をして、再会を約束して館を後にした。

事務局長三沢亜紀さんの司会で交流した

翌日はお楽しみのりんご狩り。たわわに実った、シナノスイート、紅玉を5個もいで、お土産に。試食でもぎたてのりんごに舌鼓を打つ皆さんの顔もりんごのように紅く輝いているようだった。南アルプスの山並みを背景に写真を撮り終え、一路尼崎へ向かった。

今回は1泊ということもあり、学習者の参加が少なくて少し残念だった。次年度は日帰りで、みんなが参加できて、楽しく過ごせる研修旅行を計画したいと思っている。

学習者の下平淑子さんと趙維禄さんの家族は、長野県から送り出された開拓団の一員だった。事務局長の三沢さんが取り出してくれた長野県開拓団の名簿には家族の名前が記載してあった。お二人とも興奮し、大喜びだった。（山本育子）

りんご狩りの後、南アルプスを背景に記念撮影

長野県の開拓団の名簿に家族の名前を見つけた趙維禄さん（左）と下平淑子さん（中）

編集後記

21号の発行がずいぶん遅れてしまいました。皆さんに励まされながらやっと発行の日を迎えました。本号は昨年からの宿題が積もり6ページになってしまいましたが、どうぞご一読ください。

コロナ禍での日本語教室ですが、昨年は10回しか開催できず、厳しい状態が続きました。今年度は恐るおそる4月から再開したものの参加者が少ない日が続いていました。幸いなことに9月の研修旅行の頃から、皆さんの元気な顔がみえるようになり安堵しています。

しかしながら、最近は学習者とスタッフともに参加できなくなった方が増えています。平均年齢がおよそ80歳の中国残留日本人の学習者にとって、3年近いコロナ禍の年月は長く、姿が見えなくなったのは本当に寂しいかぎりです。

今月、11月26日には、いよいよ第8回の中国残留日本人への理解を深める集いを開催します。今回は日本に住み懸命に生きる中国残留日本人2世の方に焦点を当てた集いを開催します。そして日本語教室も心新たに2世の方たちを迎えながら、充実させていきたいと思っています。ご支援をよろしくお願いします。（M）